D. H. Lawrence と Spanish America

宮　田　満　雄

D. H. Lawrence の年譜に目を通すと，彼がいかにその生涯において母国英国脱出を企て，放浪の生活を送ったかということが明らかとなる。1912年，Frieda とドイツに駆け落ちしたのを皮切りに，何回となく，イタリー，スイス，フランス，オーストラリヤ，メキシコ，ニュー・メキシコと渡り歩いた。そして，その放浪の先々で，常に新しいインスピレーションを得て作品を作り出していったのである。この小論は，彼が特に心を魅かれた，Spanish America といわれるニュー・メキシコ，及び，メキシコに焦点を合わせて，何故この天才が，大西洋を越えたはるか遠いこの地に心を魅かれたのかを，主として彼の書簡，紀行文，評論，及びその時代の彼について書かれたものを中心に探ろうとするものである。

Lawrence は，1885年9月11日，英国中部 Nottinghamshire 市近郊の Eastwood で生まれた。父親は，この炭坑村に育ち，6才頃から坑内にやらされていたということである。従って，教育も満足に受けていない人であった。母親は，英国東海岸の町で造船所の職工長をしていた人の娘であり，教師の経験もあり，文学をたしなみ，詩を作ったりしたこともある，いわゆるインテリ女性であった。彼女は，Lawrence の他に，四人の子供，息子二人，娘二人をもうけていた。Lawrence は，その成長期において，父親よりも母親と深い結びつきを示していたといわれている。母親は，無教育で酒飲みの夫とうまくいく筈はなく，従って父親は居酒屋で時を過ごし，帰れば夫婦喧嘩がもちあがるという仕末で，母親の愛情が，次第に子供達に向けられたのも自然の成り行きであった。彼等の結びつきは，この酒好きで粗野な父親を締め出してしまい，Lawrence 自身が，父の身代りに母親の愛情を受ける結果をもたらした。それは *Sons and Lovers* (1913) において，夫婦の不和が，夫を次第に酒屋に追いやり，妻の心は次第に夫から離れて子供達に傾き，長男のWilliam が母の献身的な愛情を一身にうけて成長していくのに似ているといえるであろう。Stephen Potter はこの点について，彼等の関係がまるで夫婦の関係に似ていたと述べている。[1] 又，Aldous Huxley もこの点につき，次の如く記している。

> Explanation of him in terms of a Freudian hypothesis of nature may be interesting, but they do not explain. That Lawrence was profoundly affected by his love for his mother and by her excessive love for him, is obvious to anyone who has read *Sons and Lovers*.[2]

彼は，次第に知性的な青年に成長し，13才の時に，奨学金を得て Nottingham High School に入学した。高校卒業後しばらくして，教員免許状を取得するために，Nottingham University College に進んだ。ここで，人々の人生に対する姿勢が生気のない，画一的なものであることを知るに至った。Lawrence の過ごしたこの時代は，いわゆる Victorianism の時代であり，この時代のもつ偽善的，感傷的，且つ観念的な生活態度は，彼の最も排斥するところとなった。時代の思潮に自己を埋没し，固定観念のもとにお上品な伝統を楽しんでいる人々の人生態度は，彼に嫌悪の念を生ぜしめた。Lawrence は，このような状況の中にあって深い懐疑を抱くに至ったのである。Potter は，この点を次の如く述べている。

> Did this world suit Lawrence now he came to know it better ? He knew himself to be an extraordinary young man; but to

1) Cf. Stephen Potter, *D. H. Lawrence, A First Study*, New York, 1930, p. 19.

2) *The Letters of D.H. Lawrence*, Edited with introduction by Aldous Huxley, New York, 1932, p. xi.

push to high ideals was rude here, not the exception. Everyone else had arrived so easily at the conclusions he himself had worked to step by step. What was the good of being emancipated if everyone else was emancipated too? A dogma of emancipation. Lawrence began to feel a strong repulsion.[3]

かくして，彼は社会に対して強い反発をおぼえ，更にこれが後にはすべての白人社会文明に対する憎悪にまで発展するのである。

すべてのものが生気を失っていると判断した時，彼の心にわいてきたものは，この社会に対する憎悪の感情であった。そして，この社会に関わりをもつすべての事物は，悪を内包していると考えた。更に，彼が悪と考えるこれらの相対物こそが善を内包するものであると考えるに至った。彼のこの概念を Potter は，'a philosophy of two worlds' とよび，次のように述べている。

The novelty of this reversed idealism, and the fact that Lawrence propounds it in most of his books has its advantages. The definiteness of this surface moral makes his writing in some way palatable. His method of stating every question in terms of the opposition of two contraries has force. Science discussion, the motive of life, leadership of men, cosmogonies are all expressed antithetically. Lamb—Tiger. Love—Power. Sympathetic ganglia—repelling ganglia. Mankind—individuals.[4]

Katherine Anne Porter も又，この点に言及して次のように述べている。

His world is a place of complex despair, his tragedies are of the individual temperament in double conflict, against the inner nightmare and the outer unendurable fact. Terror of death and nausea of life, sexual egotism and fear, a bitter will-to-power and aspiration after mystical apartness, an impotent desire for the act of faith, combine into a senseless widdershins; they spin dizzily on their own centers of sensation, with a sick void at the core.[5]

相対的な相反する二つの世界を常に意識していた Lawrence においては，その中間を進むということは考えられず，常に一方を憎み他方を望むという二者択一でなければならなかった。黒か白かであって，その中間の灰色であってはならなかったのである。*Mornings in Mexico* (1927) の中で，Lawrence 自身がこの点を明らかにしている。

The Indian way of consciousness is different from and fatal to our way of consciousness. Our way of consciousness is different from and fatal to the Indian. They are not even to be reconciled. There is no bridge, no canal of connection.[6]

更に又，

The consciousness of one branch of humanity is the annihilation of the consciousness of another branch. That is, the life of the Indian, his stream of conscious being is just death to the white man. And we can understand the consciousness of the Indian only in tems of the death of our consciousness.[7]

とも述べている。

Lawrence が魅かれた世界は，主として喧騒に満ち，腐敗した文明世界から離れた世界であった。それは，文明に未だ犯されていない世界であり，小さな，粗末な家に住んでいる未開人の世界であった。太陽や月等に象徴される自然と，文明から隔絶された未開の生活とがもつ奇妙な，調和した世界，これこそ彼の世界であったといってよい。換言すれば，自然のままに生きる喜びに溢れた世界であるといえよう。それに反して，彼の嫌

3) Stephen Potter, *D.H. Lawrence*, p. 22.
4) Ibid., p. 25.
5) Katherine Anne Porter, *The Days Before*, New York, 1952, p. 263.
6) D. H. Lawrence, *Mornings in Mexico*, New York, 1927, p. 104.
7) Ibid., p. 105.

悪した世界は，彼が生まれた19世紀後半から20世紀前半にみられる英国のような場所であった。Lawrence は，現代英国社会が，真の心のつながりを失っていると感じており，その社会に生きる個人は，精神的にも，物質的にも強制された生き方を余儀なくされており，まるで歯車のようであると感じていた。彼は，

> Nowadays, also, a change has come over all that. The Englishman only wants to be soft and nice and comfortable, and to have no real responsibility, not even for his own freedom and independence.[8]

と述べ，Victorianism を攻撃し，更に

> The insuperable difficulty to modern man is economic bondage. Slavery! Well, history is the long account of the abolishing of endless forms of slavery, none of which we ever want back again. Now we've got a new form of slavery.[9]

と述べ，人間が社会における経済機構の歯車と化していく姿に激しい怒りを表明している。

彼は，英国のみならず，すべての文明国に対して同様の感情を示した。すべての人々が一定の方向に方向づけられ，画一的な物の見方，生活態度をもつに至ることが，彼には我慢できなかったのである。彼は，このようにすべての人を conformity に導く現代社会のもつ方向づけを，'slavery' とよんだのである。それは，*Rainbow* (*1915*) などに出てくる坑夫達の姿，すなわち，次第に地下の奴隷と化する彼等の姿の中に象徴的に表わされている。Lawrence は，このような社会にあっては，真に主体的に生きることが困難であると考えたに違いない。彼は，この沈滞しきった社会について，吐き出すように次の如く記している。

> England is the easiest country in the world, easy, easy, and nice. Everybody is nice and everybody is easy. The English people on the whole are surely the *nicest* people in the world, and everybody makes every thing so easy for everybody else, that there is almost nothing to resist at all. But this very easiness and this very niceness become at last a nightmare. It is as if the whole air were impregnated with chloroform or some other pervasive anaesthetic, that makes everything easy and nice, and takes the edge off everything, whether nice or nasty.[10]

Lawrence は，その容貌からも推測できるように，非常に sensitive な人物であった。それは常人とは違った鋭い感受性というか，或るいは，敏感なセンスであったといえよう。従って，彼は，社会や人間の諸問題については常に深く鋭い洞察力をもっていた。それ故に，このような彼が，社会や人間の皮相の姿に満足する筈はなく，常にその背後に潜む真理にその焦点を合わせていたといってよい。彼は，常に別な次元の精神と目的とをもっていたのである。そのような視点に立って，彼は，小説，評論，更に詩を通じて人間の生き方の問題，すなわち，いかに真実に生きることが可能であるか，又いかにこの人生から真の生きる喜びをつかみとることができるかという問題を追求したのである。Lawrence と美しい友情を結んでいたHuxley は，この点につき，彼自らが編纂した *The Letters of D. H. Lawrence* の序文において次のように記している。

> Lawrence's special and characteristic gift was an extraordinary sensitiveness to what Wordsworth called 'unknown modes of being.' He was always intensely aware of the mystery of the world, and the mystery was always for him a *numen*, divine. Lawrence could never forget, as most of us almost continuously forget, the dark presence of the otherness that lies beyond the boundaries of man's conscious mind.[11]

更に彼は，

8) D. H. Lawrence, *Assorted Articles*, New York, 1930, p. 91.
9) Ibid., p. 94.
10) Ibid., p. 97.
11) *The Letters of D. H. Lawrence*, p. xi.

He had eyes that could see beyond the walls of light, far into the darkness, sensitive fingers that kept him continually aware of the environing mystery.[12]

と述べて，Lawrence の特徴を浮彫りにしている。

Lawrence は，"The State of Funk" の中において既成の概念や解決法が，最も危険なものであると警告を発し，[13] 更に，"Enslaved by Civilization" の中で

The one thing men have not learned to do is to stick up for their own instinctive feelings, against the things they are taught.[14]

とも述べて，あまりにも既成観念にとらわれ，そこに自己を埋没している社会の人々に警告と批判を与え，彼の義憤を表明している。

彼は，常に自分の住んだ当時の英国社会に反発を感じており，どうしても，既成の秩序，価値，伝統，或るいは更に，当時の人々の上品ぶった生活態度を受け入れることができなかったのである。

それでは，Lawrence にとって，いかなる人生が真の人生であると理解されていたのであろうか。彼が，Mabel Dodge Luhan 宛に出した手紙の中には次のように記してある。

But it seems to me, the life that rises from the blood itself is the life that is living.[15]

Huxley も，「書簡集」の序文において，Lawrence が，1912年に，自分の心から信じることのできるものが"religion in the blood, the flesh" であるといった事に言及している。[16] 彼は，観念的に人生を考えるのではなく，生命の神秘を宿している自分の肉体の内に，真の人生を求めていたのである。彼が，生命主義者とよばれる所以である。'Two-world philosopher' とよばれる Lawrence は，人間の内に存在する外向的な力と，内向的な力との対立を常に意識していた。そして彼は，個人の内部に存在し，個人と共にあるもの，即ち，彼が或る場合には精霊，又他の場合には神霊，生命，純粋な存在と呼ぶところの実在を信じ，その方向に進もうとしたのである。

Lawrence は，妻 Frieda と共に，1923年及び1924年の二回にわたってメキシコを訪れ，更に，1922年，1924年，1925年には，ニュー・メキシコを訪れた。Mabel Dodge Luhan の *Lorenzo in Taos* (London, 1933), Dorothy Brett の *Lawrence and Brett* (Philadelphia, 1933), Eliot Fay の *Lorenzo in Search for The Sun* (New York, 1953), Catherine Carswell の *The Savage Pilgrimage* (New York, 1932) 等を見ると，当時の Lawrence の様子が詳細に記してある。

Lawrence をニュー・メキシコの Taos に招いたのは，Mabel Dodge Luhan であった。もともと彼自身は，白人の文明から隔絶して住んでいるこの未開の人々のもつ世界に深い興味を示してはいたのだが，Luhan 宛の手紙の中で彼は，次のように記して，彼のこの地に対する期待を明らかにしている。

I believe what you say—one must somehow bring together the two ends of humanity, our own thin end, and the last dark strand from the previous, pre-white era. I verily believe that. Is Taos the place? [17]

Lawrence は，最初，タオスというこの土地が，真に彼の望んでいる場所であり，彼の期待を十分に満たしてくれる場所であるかについて疑問を抱いていたようである。Luhan と再度交信することによって，彼は，タオスを訪れる決心がついたようである。オーストラリヤのシドニーから彼女宛に出した手紙の中に，

I do hope I shall get from your Indians something that this wearily external white world can't give, and which the east is

12) Ibid., p. xiv.
13) Cf. D. H. Lawrence, *Assorted Articles*, New York, 1930, p. 110.
14) Ibid., p. 137.
15) Mabel Dodge Luhan, *Lorenzo in Taos*, London, 1933, p. 132.
16) *The Letters of D.H. Lawrence*, p. xiv.
17) *Lorenzo in Taos*, p. 18

just betraying all the time.[18]

と述べて，ニュー・メキシコに対する彼の強い期待を表明していることは興味深い。

かくして彼は，自分の国において見出せなかったものを，この全く異なる人間と，その神秘的な生活のいとなみの中に見出す期待に胸をふくらませて彼地に赴いたのであった。Lawrence 夫妻は，1922年の9月，オーストラリヤからサンフランシスコを経由してタオスに到着した。

Pueblo インディアン達は，スペイン人達によってカトリックに改宗せられてはいたが，9月30日には，彼等の守護神である San Geronimo の祝祭を祝うのが常であった。当日，San Geronimo の像が，祭りで狂気のように賑わうタオスの通りをねりあるいた。この異教的な要素と，キリスト教的な要素との奇妙に混ざり合った光景に，Lawrence は強く心を魅かれた。又，インディアン達が，祭りの興奮のうちに行う彼等独特の舞踏についても，Lawrence は，強い関心を示したのである。1927年に出版された *Mornings in Mexico* の中の "Dance of the Spring Corn" 及び "The Hopi Snake Dance" において，彼は，このインディアン舞踏について詳細に述べている。Hopi インディアンの snake dance を鑑賞した後，アリゾナからの帰途，彼は，Middleton Murry 宛に手紙を書き，次のように記している。

That trip to the Hopi country was interesting, but tiring, so far in a motorcar. The Navajo country is very attractive—all wild, with great red cliffs bluffing up. Good country to ride through, one day. The Navajo themselves real wild nomads; alas, they speak practically no English, and no Spanish. But strange, the intense religious life they keep up, in those round huts. This animistic religion is the only live one, ours is a corpse of a religion.[19]

英語もスペイン語も全く解しないこれらのインディアン，文明の枠外に生活をいとなむ彼等，赤土をむき出しにした荒々しい自然，彼等の原始的宗教に対する信仰，これらすべてを Lawrence は "attractive" というのである。彼等の中に躍動している原始的な宗教心の前には，Lawrence の育った英国に代表される文明社会における宗教，特にキリスト教は，形骸のように思われてくるのである。彼が，インディアン舞踏によって受けた感銘は，次の彼の記述を見れば一層明らかとなってくる。

But the real Indian song is non-individual, and without melody. Strange, clapping, crowing, gurgling sounds, in an unseizable subtle rhythm, the rhythm of the heart in her throes: from a parted entranced mouth, from a chest powerful and free, from an abdomen where the great blood-stream surges in the dark, and surges in its own generic experiences. This may mean nothing to you. To the ordinary white ear, the Indian's singing is a rather disagreeable howling of dogs to a tom-tom. But if it rouses no other sensation, it rouses a touch of fear amid hostility. Whatever the spirit of man may be, the blood is basic.[20]

我々に耳慣れたリズムと旋律の感覚からすれば，犬の遠吠えのようにしか響かない彼等の原始的な歌と，それに調子を合わせておどる舞踏の中に，Lawrencee は，人間の虚飾をぬぎ捨てた，というより，そのような飾りとは無縁なところで生存している人間の動物的なまでの素朴な姿を見て，自身の内に脈打って流れる血の中に潜在する原始への郷愁を強く刺激されるのである。彼の良き友人であり，理解者であった Huxley も述べているように，Lawrence の宗教というものは，上述の "The blood is basic." という言葉でも明らかなように，人間の肉体に内在する原始的な資質に対する信仰であるといえる。彼は，人間が小賢しい智恵に凝り固まることを極端に嫌った。それは，人間がこの文明社会から得る知識が，我々をとりまく世界，或るいは，宇宙の神秘性に対する感受性を鈍らすと考えるからである。この点で，インディアンの生活の中に，Lawrence は，彼がすでに白人の社会からは失われたと感じているも

18) Ibid., p. 34.
19) *The Letters of D.H. Lawrence*, p. 618.
20) *Mornings in Mexico*, p. 108.

のを発見したといえよう。Mabel Luhan の次の記述は，それを如実に物語っている。

> Life, with Indians, is not all in the head, with the occasional shriek of an orgasm to break the numb silence of the flesh. No, life is defused over all the surface of them. They are forever bathed entire in the flow and wash of it, so that their limbs have a radiance, and an expression as vivid and speaking as a smile. Yes, they talk, those brown bodies, and laugh. And in sorrow and anger their very backs and bellies are more eloquent than the speech of our lips.… I do not know anything more irresistible than a roomful of Indians dancing to the drum. The air is filled with life and joy. And there Lorenzo found his holiday. You should have seen how he flowed off into it, Jeffers, dancing step, with a dark one on either side of him, round and round in a swinging circle for hours. We all danced until we were fresher and more fresh, lighter and happier. At midnight everyone was joyous with lightened hearts.[21]

Lorenzo in Search of the Sun の著者である Eliot Fay は，タオスにおいては Lawrence が新聞を決して読まなかったことに言及している。Lawrence 自身は，このことに対して，

> The great social change interests me and troubles me, but it is not my field. I know a change is coming—and I knew we must have a more generous, more human system, based on the life value and not on the money values. That I know. My field is to know the feelings inside a man, and to make new feelings conscious.[22]

と述べている。先述の如く，彼の関心事は，激しく変動する社会，すなわち，人間が益々複雑な社会機構の歯車にしかすぎなくなる近代社会にあって，いかに主体的に生きることが可能であるかを探究する点にあったといえよう。そのために，彼は，Victorianism に代表される古い世界のみならず，科学的な発明発達の著しい新しい世界に対しても，挑戦せざるを得なかったのである。

Lawrence は，1923年及び，1924年の二回にわたってメキシコを訪問した。メキシコの Chapala に滞在中，彼は，小説 *The Plumed Serpent* を書き，1926年に出版した。最初，Aztec の神，Quetzalcoatle の名前をそのままこの小説の題名にする予定であったらしい。Quetzalcoatle は，Aztec の神々の中で中心的な神であり，その言葉の意味は「翼のある蛇」である。この小説の主人公は，アイルランド人の Kate Leslie という40年輩の女性である。彼女は，アイルランドの自由と独立のために献身した夫と死別し，単身メキシコに渡る。そして，このメキシコの社会の根底に無気味に燃えているインディアンの神秘的な世界に次第に触れていく。彼女は，メキシコにおいて初めて見た闘牛の惨たらしさに嫌悪の情をいだくが，次第に Aztec の神である Quetzalcoatle にひかれて行く。他の二人の登場人物，メキシコ人の Don Ramon と Don Cipriano は，政治的な理由から，Aztec の生命の神である Quetzalcoatle の信仰を人々の間に復活させようとしている教祖的な人物である。彼等は，この原始的な信仰をひろめることにより，メキシコを救済せんとしている。Kate は，偶然に闘牛見物の帰途，Cipriano とめぐりあう。西欧的な教養をそなえている彼女は，Cipriano 達のリバイバル運動に反発するが，次第に西欧的な自我を脱して，この神秘的な世界にとびこみ，新しい生命の息吹きを感じるに至り，結局彼と結ばれることとなる。この過程において，Lawrence の持つ文明への呪詛と，本能，すなわち，根源的な生命力の高揚が，見事に描き出されている。Kate と Cipriano の結婚にあたって，その異教的な儀式の中で，Kate は，"This man is my rain from heaven." といい，Cipriano はこれに応答して，"This woman is the earth to me." という。ここには，性の完全な調和による新しい生命の創造が，神秘的に象徴されており，性生活における女性に対する男性の優位が明示されている。

---

21) *Lorenzo in Taos*, p. 179-180.

22) *Lorenzo in Search of the Sun*, p. 46.

この作品には，Lawrence のもつ生命主義，つまり，性本能に根ざす生命奔流そのものに対する彼の関心と信奉が見事に描き出されている。この作品は，本国においては，かならずしも歓迎されたわけではなく，又，その構成の面から考えても，決して無駄がないわけではないのであるが，Eliot Fay が語るように，これは，"a powerful evocation of Mexico, past and present."[23] である。そして，この作品が，Lawrence 自身原始文明の中心であると感じ，魅惑されていたメキシコにおいて書かれたという点が興味深い。おそらく，このヨーロッパ的な作家が，この異教的な生命力の躍動するこの地においてのみ創造し得た作品と考えてよいであろう。

1923年10月17日附の Catherine Carswell 宛の手紙の中で，彼は，"Mexico has a certain mystery of beauty for me, as if the gods were here."[24] と述べ，更に，1924年8月8日附，Harriet Monroe 宛の手紙においては，次のように述べている。

> We find Taos very pleasant again—very beautiful—and the raging spirits somewhat soothed. My wife just calming down, after the depressing swirl of Europe, and Dorothy Brett blissfully happy on an old horse. Both sending you warm regards. I must say I am glad to be out here in the southwest of America—there is the pristine something, unbroken, unbreakable, and not to be got under even by us awful whites with our machines—for which I thank what ever gods there be.[25]

1923年12月，Lawrence は，その年の8月に本国へ単身帰した妻を求めて，自らも帰国し，しばらく本国での生活を送ることとなったが，以然として英国の生活は，彼には我慢できず，遂に，翌1924年3月に Dorothy Brett を伴って再びニュー・メキシコにもどって来たのである。上述の手紙には，その頃の彼の気持がよく表われている。彼等にとっては，英国における生活は，"depressing swirl of Europe" と呼ぶ以外表現の仕様がないものであったらしい。このヨーロッパ旅行によって彼等の心の中に燃えあがった憤激も，白人文明社会からは得られない自然そのままの神秘をたたえているこのタオスの風物に再び接することによって，次第に落ち着きをとりもどしていったようである。彼等は，この年の10月にメキシコの Oxaca に移り住み，翌年春までここに滞在した。この地において，彼は先にあげた，*The Plumed Serpent* を完成し，*Mornings in Mexico* はじめ多くの短篇や，中篇を，病中にもかかわらず書いたのである。その頃 Catherine Carswell に出した手紙の中で，彼は，

> If the roads are passable, we shall go down to Mexico City. My spirit always wants to go south. Perhaps one feels a bit of hope down there. Anyhow, the White civilization makes me feel worse every day.[26]

と述べているが，あくまでも文明を呪詛し，わずかな希望をこのメキシコの土地に託して，病中にもかかわらず南へ南へと憧れる心情の中に，まるで泥沼の中からぬけ出そうとして必死にもがいている悲愴なまでの人間の姿を見るのである。彼の書簡集や，その他，当時の彼について書かれたものの中には，Lawrence のアメリカを含めた白人文明に対する軽蔑と，メキシコに対する深い愛着と憧憬をあらわした文章が限りなく出てくる。例へば，*Lorenzo in Taos* の中では，次のような彼の言葉が見出される。

> Frieda and everybody insist on my going to England. And I, I shall give in once more, in the long fight. I may as well go and settle finally with England. But I shall not stay long. A short time only. And directry or indirectly I shall come back here, this side, Mexico. I fight against the other side, Europe and the White and U. S.[27]

23) *Lorenzo in Search of the Sun*, p. 60.
24) *The Letters of D.H. Lawrene*, p. 589.
25) Ibid., p. 606.
26) Ibid., p. 625.
27) *Lorenzo in Taos*, p. 120.

又，彼は，ロンドンから Mabel Luhan に宛て，"England is a tomb to me, no more." と，吐き出すように書くのである。

Lawrence にとって，英国とは西欧文明の代名詞にすぎない。「英国は墓場だ。」ときめつける時，我々は，母国をこのような形でしか表現できない一人の人間の悲劇を感じると同時に，その根底において，この作家は，英国を愛し，母国に対する深い憧憬を秘めていたのではないかと考えざるを得ない。「英国は墓場だ。」という言葉の中には，愛する英国に対して抱く，深い欲求不満が表現されているようにも思われる。

Lawrence は，イタリーも好きであった。しかしながら，ニュー・メキシコとメキシコを訪ねたあとでは，以前イタリーに対してもっていた彼の愛着が変ったように思われる。イタリーから1926年10月9日に Mabel に宛て出した手紙の中で，彼は，

> I suppose Taos is all blue and gold. It is very lovely out there: much lovelier than here. If it weren't for a certain queer exalted or demonish tension in the atmosphere, I would so much rather be there than here. Italy, humanly, isn't very interesting nowadays. [28]

と記し，更に，1929年，彼は再びフランスより Mabel 宛に手紙を出し，ニュー・メキシコこそ自分が心から訪ねたく思う場所であると記している。[29]

1926年という年は，その年の3月にフローレンス近郊の Villa Mirenda に移り，病状が悪化した年である。又，1929年という年は，益々悪化する病をおして，スイス，フランスを旅行した年であった。上述の1926年に書かれた手紙をみると，さすがの Lawrence も，ニュー・メキシコのもつ demonish なまでの雰囲気にはついていけなかったようにも見うけられるが，Eliot Fay が *Lorenzo in Search of the Sun* の中に挿入している *Survey Graphic* 誌に掲載された Lawrence 自身の手記をみれば，Spanish America が，この天才にとってどのような意義を有していたかが明瞭になる。

> The moment I saw the brilliant, proud morning shine high up over the deserts of Santa Fe something stood still in my soul… for a greatness of beauty I have never experienced anything like New Mexico… I think New Mexico was the greatest experience from the outside world that I ever had. It certainly changed me forever. Curious as it may sound, it was New Mexico that liberated me from the present era of civilization, the great era of material and mechanical development.[30]

かくして，ニュー・メキシコは，Lawrence をして，「私を永遠に変えた」といわしめた強烈な魅惑をもって，この放浪の天才をひきつけたのである。Lawrence が，故国をさまよい出た原因はいくつかあろうし，又複雑なものであろう。しかしながら，第一次大戦後，すべてのものの価値が失われ，人間自身すらも死滅し，堕落したと考えられる英国にいたたまれなくなった事は事実である。そして，彼のもつ人間主義，生命主義，更に原始主義的な傾向が，この Spanish Amenrica とよばれるニュー・メキシコ及びメキシコの地に生命の躍動を発見せしめたのである。かくして，西欧文明の中には見られない，不思議なこの地の魅力が Lawrence の心を強烈にとらえ，終生はなすことがなかったのである。

28) Ibid., p. 281.
29) Ibid., p. 309.
30) *Lrenzo in Search of the Sun*, p. 107.